

松 山 大 学 論 集  
第 27 卷 第 4 - 2 号 抜 刷  
2 0 1 5 年 10 月 発 行

## 「さとあい」よもやま話

—— 四国地区キャンパス SNS 協議会と墨岡先生のこと ——

金 西 計 英

# 「さとあい」よもやま話

—— 四国地区キャンパス SNS 協議会と墨岡先生のこと ——

金 西 計 英

## 墨岡先生と「さとあい」の出会いのこと

2008年のバレンタインデーが過ぎたころ、富士通四国システムズ（当時）の高木知弘さんと一緒に松山大学を訪問したのは、墨岡先生に四国キャンパス SNS 協議会への参加を要請するためだった。当時、我々は、四国の大学生を対象にした地域 SNS「さとあい」を立ち上げたものの、四国全体から利用者を集めることに苦戦していた。「さとあい」を軌道に乗せるため、今日は高知、明日は高松と、説明に東奔西走していた。四国の各大学に対する宣伝の中、愛媛での説明が企画された。高木さんが人脈をたどったところ、松山大学で説明するなら、墨岡学なる教員へアプローチを掛けたらどうかとなった。この段階で、我々は初めて墨岡先生を知ったわけである。ITに造詣が深く、情報通信技術を利用して地域の活動にも取り組んでいる（後に、英語の俳句投稿サーバの活動のことを知る）ことから、「さとあい」へ協力を仰ぐにぴったりの人物ではないかということになった。そこで、我々が四国キャンパス SNS 協議会事務局として、墨岡先生に面会を申し込んだところ、訪問の機会を得ることが出来た。この時が、墨岡先生にお会いするのは初めてであった。この時から、墨岡先生にご厚誼を頂いている（と、私の方は勝手に思っている）。

その墨岡先生から、2014年度末に、ご自分の退職記念の論集に「さとあい」のことを書いてもらえないかと電話を頂き、面食らった。墨岡先生からの直接の依頼だったことでもあり、引き受けることにしたものの、電話を切った直後、

貴重な記念論集に、私のようなものが文章を寄せて構わないのかとか、一体何を書いたら良いのかといったことが頭のなかを渦巻き、放心状態となった（墨岡先生へ肝心の慰労の言葉を掛けなかったことに気が付いたのは、電話を切った後である）。そんなことで本稿がこのような形で掲載されるに至った。

拙稿では、とりあえず、墨岡先生と「さとあい」の関わりについて備忘録のようなものを書かせてもらう。「さとあい」の中で墨岡先生と関わりがあった（と私の思う）関係者に聞き取りしたことを元に、墨岡先生と「さとあい」の間を繕くことにする。ただ、「さとあい」の活動休止から2～3年しか経っていないにも関わらず、当時の資料やシステムが四散してしまっており、内容の正確性といった点からは問題があることをお許し頂きたい。こんな軽い調子で書いていっても許されるのかどうか不安ではあるが、拙稿は内容の正確性を吟味するというよりは、にやにや笑ってもらい、読み飛ばしてもらうことを願う。もちろん、我々が惚れ込んだ墨岡先生の人柄が、少しでもお伝えできれば幸いである。なお、本稿は、「さとあい」関係者からの伝聞の形をとっているが、記載された内容については金西が責任を負う。

## 「さとあい」のこと

「さとあい」について簡単に説明しておく。「さとあい」とは、2007年から約6年間、徳島大学で運用された地域 SNS の一種である。SNS とは Facebook、mixi に代表されるソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）のことである。

2015年の現在、我々の日常はソーシャルメディアが隆盛を極めており、日々、多くの新しいサービスが生まれ出され、お互いに競い合う状況が定着している。もはや SNS は数あるソーシャルメディアの一つにすぎない。2007年ごろは、アメリカ生まれの SNS である Facebook が欧米中心のサービスから、世界を目指した商用のサービスとして胎動を始めたところで、Twitter は生まれたばかり、LINE は生まれてもいない状況であった。ソーシャルメディアと言え

ば SNS という状態であった (SNS 以外のサービスは、よちよち歩きの状態で、サービスとしての SNS が目立っていた)。国内では、mixi、GREE が商用の SNS サービスとして定着していたものの、スマホの本格的普及前のガラケー中心の世の中で、誰もが撮った写真をその場で Instagram にアップなどということは夢のまた夢であった。

SNS の普及について Facebook、mixi といった商用サービスは存在していたものの、一方で、OpenPNE のようなオープンソースの SNS 運用ソフトウェアが公開され、有志が手作りの SNS サービスを運用することが当たり前の状況であった。

一言で言えば、SNS が熱かった時代である。熊本県八代市の「ごろっとやちろ」、兵庫県姫路市の「ひよこむ」に代表される地域 SNS が次々に立ち上がっていった時代である。最盛期の 2010 年ごろには、国内で数百の地域 SNS が運用されていた。地域 SNS は、NPO、地方公共団体、任意団体等、さまざまな形態で有志が自らサーバを用意し、サービスを始め、自主的に活動していた。地域 SNS は、全国や全世界を対象とするのではなく、サービスの範囲を限定することで（多くは地域という範囲で）、コミュニティの構成員間のつながりの強さが保たれると考えた。その結果、SNS 内の活動、つまり、SNS 内の書き込みが増えると考えたわけである。さらには、地域という形で、サービスの提供範囲を限定することで、現実社会と SNS のリンクも容易になると考えた。つまり、コミュニティ内の活動を、現実社会へ反映するとき、構成員が近くにいた方が集まり易い。コミュニティでボランティアの清掃活動だったり、料理教室だったりを呼びかけたとき、集まり易い地理的な範囲が存在する（吉野川の清掃活動に、わざわざ東京から駆けつけるというのは現実的ではない）。

2006 年ごろの地域 SNS が各地で勃興する時代背景を受け、徳島大学でも、富士通四国システムズ（当時）との共同研究という形で協力を仰ぎながら、地域 SNS を立ち上げることになった。それが「さとあい」である。「さとあい」は 2007 年に産声を上げた。「さとあい」は地域 SNS として、四国内を範囲と

して想定した。四国というのは、地域 SNS のサービスの対象範囲としてはやや広く、そこで大学生（および卒業生）と教職員というコミュニティを想定した。新しい情報通信の技術に対する感度が高いのは若い世代であり、世代を限ることで、より濃厚なコミュニティが形成できるのではないかと考えた。地域を限定する SNS が普通であり、特定の世代（大学生のような）を狙った SNS というのは、余り存在してなかったということもある。そこで、四国地区の大学生をターゲットとした地域 SNS というものは、ありではないかと考えた。「さとあい」は四国の大学生を対象とし、四国の大学生を元気にするというポリシーを立てた。四国の地域 SNS であることから、四国の旧国名の讃岐、土佐、阿波、伊予の頭文字を一文字ずつ取って「さとあい」と名付けた。

四国の大学生のための SNS 作りましたと言って、サーバを用意し、サービスを始めて、すぐに利用者が集まるわけではない。一定の利用者を集めるために、広報活動が、どうしても必要になる。そこで、「さとあい」というサービスを始めるとともに、四国キャンパス SNS 協議会という団体を立ち上げた。四国の大学生へ「さとあい」を普及させるためには、母体となる組織を作る必要があったためである。また、各大学において「さとあい」の協力者（普及のことを考えると教職員）を集めることも目的としていた。SNS という性格上「さとあい」への参加はあくまでも任意であり、誰でも参加することができる（一応、招待制なので、厳密な意味で誰でもというわけではないが）。我々としては、どの大学が参加しているかといったことを数える必要があり、SNS の運営団体を組織し、その会員に誰がなっているかというので参加大学の数を数えることとした。我々は、四国キャンパス SNS 協議会の事務局として、四国内のいろいろな大学へ「さとあい」の説明に出向くことから始めた。香川大学、高知大学、高知工科大学へは知り合いを頼って、訪問をおこなった。愛媛県では、愛媛大学と松山大学の名前が挙がった。松山大学の墨岡先生への訪問の経緯は上述の通りである。墨岡先生には、松山大学での「さとあい」の参加者増加を狙った我々が、「さとあい」への参加と、四国キャンパス SNS 協議会への

参加をお願いしたわけである。墨岡先生には、この要請を快く引き受けてもらった。こうして我々と、墨岡先生との付き合いが始まった。

「さとあい」のシステムは、オープンソースとして開発されていた SNS 運用ソフトウェアである OpenPNE をベースに開発された。日記、コメント、コミュニティ、あしあと、レビュー、プロフィール検索といった SNS が必要とする標準的な機能は、全て網羅していた。その上、「さとあい」では幾つかの機能を、OpenPNE に付加した。あしあとの数をカウントしてランキングを表示する機能、タウンペディアと呼ぶ SNS のメンバーがあるキーワードを共同で執筆する機能を追加した。その他、外部の認証基盤と連携し、シングル・サイン・オンを実現する機能も追加していた。「さとあい」のシステムは、地域 SNS として機能豊富であったといえる。

「さとあい」を活性化するために、いろいろな企画もおこなった。例えば、徳島のタウン誌「あわわ」と連携して、「あわわ」に毎月「さとあい」のコミュニティの紹介記事を掲載してもらった。また、学生サークル等の各種学生団体や、四国の外から四国を盛り上げる活動をしている HIP (Home Island Project) 等の外部団体とも連携し、地元の中小企業を巡るバスツアーをおこなったり、徳島バーガーのコンテストに応募したりした。もちろん、学生と教職員との交流や、大学間の学生の交流をおこなうといった、いろいろなコミュニティが生まれ、それぞれが活発に活動していった。定常的には2,000名程度が「さとあい」を利用していた。さらに、torinanban さん(当時、徳島大学生)に「さとあい」のキャラクター、さとあいちゃんを作成してもらい、パンフレットやシールを作成した。さとあいちゃんは、一部に好評を博した。その他「さとあい」の活動について詳しく知りたい方は、嵯峨山さんがまとめた報告(嵯峨山和美他, “キャンパス SNS (Social Networking Service) 「さとあい」における学生行動の分析と学生支援の可能性”, 大学教育研究ジャーナル, Vol. 6, pp. 1-12, 2009.) が公開されているので、こちらを参照されたい。



図1. 「さとあい」マスコットキャラのさとあいちゃん



図2. 「さとあい」のログイン画面

## 金西のこと

まず、私から墨岡先生の聞き書きを始めることとする。冒頭の、墨岡先生との出会いへ話を戻す。その日は、2月なので雪で交通が混乱したということではなく、曇り混じりの冬の日だったと思う。松山大学に到着した我々は、受付におとなったところ、本部だかの重厚な扉が連なった（絨毯も敷いてあったかも）フロアに通され緊張したことを思い出す。

先に書いた通り、「さとあい」の参加者増加のために我々はあちこちの大学で説明をおこなっていたが、墨岡先生へは四国キャンパス SNS 協議会への参加も打診する予定であった。松山大学の常任理事ということを予習していた我々は、墨岡先生に対し、勝手に眉間にしわを寄せた強面のイメージを膨らませていた。けんもほろろに追い出されることを想像し、どきどきしていた。理事室の扉が開かれ、中からニコニコした笑顔が現れた瞬間、我々の緊張は消し飛んでしまった。面会でどんな説明をしたかは、さっぱりと忘れてしまったが、その場で即答というよりも、考えさせてもらいますという答えだったと記憶している。地域 SNS とかいう訳の分からない話を持ち込んだ我々に対し、しっかりとこちら話を聞いてもらったという印象が残っている。穏やかそうなという感じと、情報通信技術についての造詣が深いという感じを抱いた。後から、国内のインターネットの黎明期から、松山での普及に深く関わっていたということを知って驚いたことを憶えている。「さとあい」に対して、何かしら通ずる感覚を持ってもらえたことは、その後、「さとあい」に最大限協力してもらったことから明らかであった。

面会の後、徳島へ帰るバスの発車時間まで、道後温泉で休憩したような記憶がある。松山大学から道後温泉までは歩いて 20 分程度であり、長めの待ち時間があつた我々の足は自然と道後温泉へ向かった。道後温泉本館の二階で、風呂から上がって涼みながら、高木さんとその日の面談の内容を反芻しながら、うまくいったらろうか、いやどうだったろう、やさしそうな先生だった等々、



勝手な印象を話し合ったような気がする。とにかく先生のニコニコした笑顔が我々の胸に深く刻まれた。

我々の訪問の後、墨岡先生は、我々の要請に快く応えてくれた。「さとあい」への登録はもちろん、四国キャンパス SNS 協議会の会員にもなってもらった。「さとあい」での活躍は、「さとあい」メンバーの中でも最大級のものである。墨岡先生は、ご自身が参加するだけではなく、多くのメンバーを「さとあい」へ紹介してくれた。招待数は、おそらく最多を誇る。授業や、公開講座の受講生を招待し、自身の授業や講座において、学生とのやり取りを、SNS 上で積極的に起こっていた。単に、学生を SNS に招待するだけではなく、招待後もちゃんと面倒を見るという姿勢には、頭の下がる思いがする。利用者にとって SNS の活用を必然として位置付ける、授業の一部として SNS を取り入れるということは、当時としては先進的な試みであった。「さとあい」では、私も含めて、複数の教員がメンバーとなっていたが、授業のツールとして積極的に活用していたのは、墨岡先生だから出来たことではないかと思われる。墨岡先生は、積極的にコミュニティを作って、「さとあい」を使いこなした一番のユーザではなかったかというのが、私の印象である。なぜなら、墨岡先生は、「さとあい」上で、積極的に発言し、多くのメンバーと積極的に交流していたからである。多くの「さとあい」ユーザが、おそらく今も“らも”さん(らもさんというのは墨岡先生の「さとあい」でのニックネームである)のことを記憶している。「さとあい」の誰からも愛されるらもさんというのが、墨岡先生の「さとあい」での姿である。

一方、我々は、墨岡先生に四国キャンパス SNS 協議会の方にも参加してもらい、一般会員から、理事、副会長へと協議会の役職をお願いした。地域 SNS は 2004 年に八代市で始まり、2010 年にピークを越えた感がある。特に、震災以降は、ソーシャルメディアの利用が変化したというのが利用者の肌感覚ではないかと思う。国内の SNS は Facebook が、日本への本格参入を始めた 2010 年以降、一強多弱状態となり、国内最大手だった mixi もソーシャルゲーム市

場へ転換を余儀なくされた。若年層のソーシャルメディアの利用は、SNS から Twitter, LINE と、よりお手軽なコミュニケーションツールへと遷移しており、2015年の現在、地域 SNS はもはや役目を終えた感がある。「さとあい」も2007年にサービスを始め、一時、利用者が2,000名を超えたものの、その後は、四国の大学生を元気にするという目標を達成するには、利用者の拡大は難しく、2012年を以て休止するに至った。もちろん、一部の利用者には好評を持って受け入れられ、サービスの継続が求められたのも事実である。墨岡先生には、「さとあい」のサーバを徳島大学から手嶋屋の運用する外部 OpenPNE サーバへ移行し、さらにサービスの休止と、面倒な案件が立て込んだ時期に、四国キャンパス SNS 協議会の副会長を引き受けもらい、苦勞を掛けてしまったと反省しきりである。墨岡先生は、メンバーの中で一番四国キャンパス SNS 協議会の趣旨を受け止めて頂いたのではないかと考える。「さとあい」を如何に活性化するかということに身骨を砕いてもらった。「さとあい」の事業を通じて、新しい事業を興すとき、その労力が大であることは言わずもがなだが、事業の継続性ということは、新たに事業を起こすのと変わらぬ労力が必要であるということ、身に沁みて理解させられた。むしろ、事業の開始は時流に乗ることで何とかなるものの、事業継続は何ともならないのが現実といえる。そうしたややこしい時期にボランティアで、多くの時間を割いてもらったことに感謝したい。

個人的な墨岡先生の印象を述べさせてもらおうと、情報通信技術に造詣が深く、そうした新しい技術が地域に普及することに腐心されていたように思われる。新しい技術に貪欲だから若々しいのか、単に新しい物好きなのか定かではないが、新しい感性をいつもまもっていたことは確かである。さらには、地域の活性化を願っており、松山や四国の活性化を、誰よりも熱く心の内に秘めておられたように感じる。とはいっても、熱く鼓舞されたというより、常に温かく見守られていたような気がする。墨岡先生の笑顔をチャーミングと感じるのは私だけだろうか。それから、何と言っても博識で、先生の時折語るトリビア

には驚かされたものである。少なくとも、車に関しては、間違いなくエンスージアストだと思っている。でなければ、12月の高知に松山からロードスターで駆けつけたりはしない、絶対にしない。車について余り語ることはなかったけれど、今度、この点については是非確認したい。

余談として、政府は今になって地域振興のような国策を掲げており、地域SNSは時代を先取りしたものだといった。「さとあい」も形を変えて、四国の大学生を繋ぐ、新しいソーシャルメディアとして何か生き返るすべがあるのかもしれない、と考える今日このごろである。

### 武知さんのこと

次に、武知智子さんから聞いた墨岡先生の印象についてまとめる。武知さんは、現在、徳島大学の薬学部にある研究室の手伝いをしているが、当時は四国キャンパス SNS 協議会の事務局の仕事をお願いしていた。つまり、「さとあい」のなかの人の仕事を請け負ってもらっていた。もろもろの雑事を担当してもらい、学外とのやり取りは、武知さん経由でおこなっていた。そのため、墨岡先生と、やり取りを一番していたのは、武知さんということになる。

墨岡先生の印象として一番に出てきたのは、iPadが発売されたとき、わざわざどこかの店に並んで買ったというエピソードだった。当時、世界でiPadが発売され、若者らが発売日にこぞってAppleストアに並んだ映像がテレビのニュース等で流されたが、その行列の中にちゃっかり墨岡先生がいたとは思わなかった。他にも、武知さんが何かのときに、電話しますとメールすると、じゃ、Skypeでと言われて、Skypeを使ったことがなく困ったそうである。電話じゃなくてSkypeを使うあたりが、ちょっと違っていると感じたそうである。単に新しい物好きというだけではなく、墨岡先生の旺盛な好奇心というか、新しいものに対する貪欲な精神については、みなが口をそろえて語る特徴のようである。続けて武知さんは語る、正岡子規と松山をこよなく愛し、また、コーヒーと車の好きな先生でしたと。墨岡先生が、俳句のコミュを立ち上

げられて、指導する学生や、公開講座の受講生さんらと活発なやり取りをされていたことを思い出すそうである。また、車種は分からないけれど、2シータのオープンカーに乗っていたことを思い出すそうである。とにかく、気の若い先生であるという印象を持ったとのことだった。

「さとあい」の書き込みから、武知さんはらもさんに対してすっかり若い生意気な大学の先生というイメージを持ったようである。武知さんの場合、墨岡先生との出会いは、ネットでのやりとりが対面に先だっていた。四国キャンパス SNS 協議会の総会で、実際に対面したとき、抱いていた印象と異なる風貌に驚いたそうである。良い意味で、若い生意気な先生というイメージは、破られたわけである。実際あってみると、感じの良い、しっかりとしたという印象だったそうである。例えば、いろいろなものにこだわりを持っているという気がしたそうで、四国キャンパス SNS 協議会の総会のための宿泊も、安いところを探すのだけれど、単に安いだけではなく、個性的なホテルを選んでるように憶えているとのことだった。

学生や受講生を「さとあい」へ最もたくさん招待したのが墨岡先生なのだが、単に学生を招待するだけではなく、授業（や公開講座）の授業時間外でも、学生（や受講生）とコミュニケーションを取るためのツールとして「さとあい」を使っていたことを憶えているとのことだった。また、墨岡先生は、学生さんから慕われていたと話す。武知さんによると、墨岡先生のところの卒業生であるつかさんと F さんの二人のことを憶えているそうである。二人は、個性的だったと話す。卒業した学生さんを招待できることから、先生の人柄をうかがえる。

それから、コーヒー好きの墨岡先生のために、「さとあい」で徳島市内のおいしいコーヒーの店を調べ、四国キャンパス SNS 協議会の総会の次の日に、川内にある徳島 IC 近くのカフェケストナーへ行っただけが良い思い出だそうである。蛇足ながら、その日のケストナーのコーヒーはおいしかったそうである。

なお、「さとあい」の休止後に、Facebook へのお誘いを受けたそうで、武知さんは Facebook へ登録をしたものの、結局、放置状態になっていて、申し訳ない思いをしているようである。最後に、また徳島にくることがあれば、是非、お目にかかりたいとのことで、宿泊は総会のとさのように安いホテルを探しますよとのことだった。

### 嵯峨山さんのこと

今度は、嵯峨山和美さんから聞いた墨岡先生の印象についてまとめる。嵯峨山さんは、現在は、知財関連の仕事に就いているが、今でも徳島大学に勤めている。当時は、「さとあい」の面倒を見ていた徳島大学の u ラーニングセンターで、特任助教として、「さとあい」を盛り上げるために走り回っていた。「さとあい」内で、いろいろなメンバーとやり取りしていた。当然、らもさんとのやり取りも一般の参加者に比べて多かった。

嵯峨山さんが抱く墨岡先生のイメージは、武知さんらが抱くイメージとかぶるところが多いが、嵯峨山さんの言葉で、墨岡先生の印象をまとめてみる。

墨岡先生に関して思い出す、あるいは抱くイメージは、何と言っても、英語の俳句のことだそうである（正岡子規を愛してやまない）。また、博学で、趣味人であると続ける。今風に言うと、ずばり、オタクなのではないかと話す（漫画に関する知識も相当なものだったということなので）。細かいことでは、車が好き、コーヒーが好き、神社仏閣や歴史のことにも詳しいといった、他の人から聞いた墨岡先生の印象と同じ項目が挙がる。

四国キャンパス SNS 協議会の総会の後の懇親会とかで、お酒を飲む際に、いつも一緒に水をたくさん用意していた印象があるそうである。また、理事といった役職にある方なのに偉ぶったところのない、話しやすい先生だったということだった。

四国キャンパス SNS 協議会の総会に、墨岡先生が学生の本田さんを連れてきて、「さとあい」の利用について、学生さんの視点からの発表をしてもらっ

たことは、強く印象に残っているそうである。学生さんに発表してもらおうというのは、自分が発表する方がずっと楽なので、なかなか、大変な仕事である。

「さとあい」のいろいろな人の日記とかをよく読んでいて、コメントもよく書いていた印象があるようで、案外、政治的な話も好きだったのではないかということだった。「さとあい」は、性格上、大学生が多くて、常識的な視点に流されることについて、疑問を持つことの大切さを指摘するようなことが多かったようである。年齢の割に、若い視点を持っているように思ったそうである。

嵯峨山さんは「さとあい」を活性化するためにいろいろ努力していたので、「さとあい」を盛り上げるために、いろいろ、骨を折ってもらったことを憶えているとのことだった。具体的には、「さとあい」は、「さとあい」を盛り上げるために、書き込みのランキングをおこなっていたが、墨岡先生は書き込みのランキング王であったことであり、また、招待者の多さでもダントツであったことで、「さとあい」への貢献は大きいことが分かる。

嵯峨山さんが、松山に出張した際、墨岡先生に松山のケーブルテレビ局だかを紹介してもらって、一緒に放送局に行ったことも印象に残っているそうである。また、そのときオリンピック等で活躍されていた、松山大のOGでもある土佐選手を応援しているとの話を聞いた憶えがあるそうである。

それから、武知さんも語った通り、iPadの発売に合わせ、銀座のAppleストアに並んで、テレビに映ったということを、墨岡先生から聞いたことを憶えているそうである。また、らもさんは、プロフィールの写真にねこの写真だかを使っていて、多くの人は何も設定しないのに、ねこの写真を使うところにおちゃめな一面を感じたと話していた。

最後に、墨岡先生には今のままでいて欲しいそうである。永遠の趣味人こそ、墨岡先生にふさわしいということのようである。

## 梶田さんのこと

次に、富士通四国システムズに勤務されていた梶田紀子さんの話を聞きたい。梶田さんは、当時、高木さんと共に「さとあい」を担当されていた。現在は、情報関連とは全く異なったフィールドで元気に働いている。結果的に、梶田さんが「さとあい」と関わったのは1年ほどと短かったものの、武知さん、嵯峨山さんらによれば、墨岡先生との「さとあい」上でのやりとりが印象に残ったという。

正直、よく憶えていないのですが、というのが、久しぶりに連絡を取った梶田さんの第一声であった。どうも、墨岡という名前を聞いても、はっきりした記憶はないということだった。らもさんに関して、当時の記憶をたどってもらうため、「さとあい」全般の印象を尋ねた。

「さとあい」は、わりとおとなしい学生さんが多かったように思うということだった。政治ネタ等の書き込み等はほとんどなく、ぼつ、ぼつ、そうした書き込みをする人がいて、目立っていた記憶があるということだった。これがどうもらもさん、墨岡先生のことらしい。梶田さん曰く、おおーっと、軽く驚いたそうである。書き込みの内容から、これは学生さんではないと思ったそうで、政治に限らず、独特の批判的な視点が感じられたそうである。

梶田さんから、直接話を聞くことはできなかったが、武知さん、嵯峨山さんによると、らもさんがときに書く、時事的な出来事に対する批判的な視点からの書き込みに対し、梶田さんが突っ込みを入れることがあったそうである。梶田さんは、我々から見るときわめて真面目な方なので、らもさんの意見に、そんなことはないですといった書き込みをすることがあったようである。らもさんに反対意見を書くような人は、梶田さんぐらいだったようで、二人のやりとりが印象に残ったという話である。当時のログが残っていないのが、とても残念である。

梶田さんは、らもさんは一風変わった書き込みをする人ということで、当時

のことを話すうちに段々思い出したようである。ただ、私、その意見は違うと思いますなんてことを書きましたか、ということで、当事者から真相は話してもらえなかった。

ただ、墨岡先生の書き込みは、学生が主体だった「さとあい」の中では、確実に異彩を放っていたことは間違いない。多くの学生には、いろんなものの方、意見があることを知ることは大切であり、ソーシャルネットワークに代表される、バーチャルなコミュニケーションのツールにとって、利用者間の多様性を意識させることは重要な機能であると考えます。「さとあい」も、そうした意味において、墨岡先生のおかげで、四国の大学生にとって、多少、役割を果たすことができたかなと考える。当時、墨岡先生とやりあってもらった、梶田さんに感謝したい。

## 妻鳥先生のこと

さらに、高知工科大学の妻鳥貴彦先生から聞いた墨岡先生の印象についてまとめる。妻鳥先生と墨岡先生の付き合いは、「さとあい」上で、格別交流があったというわけではない。「さとあい」の墨岡先生を中心にしたオフ会担当が、妻鳥先生だったわけである。妻鳥先生がとりまとめ役となり、高知県で忘年会と称するオフ会が開かれた（もちろん、昼間はちゃんとした学術的な研究会である）。ソーシャルメディアを利用する上で、バーチャルな世界だけではなく、現実世界の活動につながることはよく知られたことである。典型的な例が、オフ会の開催である。墨岡先生を中心に、「さとあい」の中で忘年会が開かれるようになったことは記しておかねばならない。

忘年会が開かれるようになったきっかけは、妻鳥先生によれば、徳島で開かれた四国キャンパス SNS 協議会の総会で、墨岡先生と妻鳥先生の間で、高知へ行きたいですね、高知へ来てくださいといった会話があったことが発端のようである。総会は例年5月の連休明けに開かれる。妻鳥先生がこうした会話を交わしたことなくってすっかり忘れていた、10月か、11月ごろ、墨岡先生から



突然連絡があったそうで、暖かい高知で忘年会を開きませんか。それで、妻鳥先生は、急遽メンバーを集め、メンバーもそろったところで忘年会を開きましたとのことだった。その後、2回、3回と、この忘年会は続くことになる。

妻鳥先生に墨岡先生の印象を聞くと、四国中央市の酒蔵が作る梅錦を愛し、車種はよく憶えてないが、オープンカーを愛されていた、とのことだった。松山大学の学生らが瀬戸内海の料理を考えるとといった企画だけがあって、この活動に墨岡先生が関わっていて、料理にいりこを使うとかで四国中央市とつながりがある、結果、梅錦と結びついたのではないかということであった。梅錦の名前を憶えていますとのことだった。また、12月に開かれた忘年会にオープンカーで来たことも、印象に残っているとのことだった。

それから、英語俳句の普及を目指していろいろな活動をされていたことと、普及のために俳句のサーバを運営されていたことも印象に残っているとのことだった。俳句という世界と、インターネットの取り合わせは、日本人にとっては、多少の違和感を持って受け入れられるものの、先入観のない外国人からすれば、世界からの投稿を集めるのにインターネットを使うことは、まったく合理的な選択だったのかもしれない。

ぱっと見は、どこにでもいる近所のおじさんといった風貌なのだが、話し出すと（お酒を飲んで話をすると）、とても楽しかったそうである。

忘年会というのは、昼間、高知工科大学でソーシャルネットワークの技術的な動向、活用方法といった話をした後、夜の部は、高知市内へ場面を移し（はりまや橋の近くで）、鰹の塩たたき、うつぼ、青のりの天ぷら、にし貝等々に舌鼓を打ったものである。高知の美味しいものとの出会いが忘年会の密かな楽しみであり、妻鳥先生のおかげで我々は毎回美味しいものにありつくことが出来た。

忘年会の夜の部はオープンなもので、妻鳥先生と妻鳥先生の研究室の学生さん、高知工科大学の関係者、「さとあい」の関係、もちろん、墨岡先生と、高知で就職された墨岡先生のところの卒業生等々のメンバーで開かれた。卒業生

を誘って、よくわからない忘年会に卒業生がやって来るところに、墨岡先生の人柄が良く現れている。学生さんとの間に信頼関係が築かれていることが、我々にも何となく理解できた。もちろん、卒業生の方も、明るい人柄で、高知で開かれる忘年会を了解されている様で、われわれのメンバーにすぐ馴染んでいたように見えた。

最後に、妻鳥先生は、忘年会が3回で終わっているので、また高知に来る機会を作って、忘年会を開きましょうということだった。

## ま と め

何人かの「さとあい」関係者から聞き取ったことをまとめてみた。うまくまとまった自信は全くない。かえって、墨岡先生の評判を落とすことにならないか心配である。墨岡先生の印象を聞いて、まとめるという作業を繰り返すと、みな同じようなことを話していることが分かった。けだし、俳句を愛している、正岡子規を愛している、コーヒーを愛している、車を愛している、新しい情報機器に目がない等々である。最後に全体のまとめを書こうかと考えたが、あえて、まとめる必要など無いことが分かった。ここに書かれたことが、「さとあい」における墨岡先生の全てなのである。

結局、「さとあい」というプロジェクトは、墨岡先生にずいぶん助けられたように感じる。墨岡先生は、英語俳句のプロジェクトを続けられていることから、インターネットを使って周りを巻き込む活動の苦労を誰よりもよくご存じなのだろうと、今なら理解することができる。人と人が関わる活動は、技術が良いからといって、必ずしもうまくいかない。それはやったものだけが分かることである。そして、我々のつたないプロジェクトを知って、プロジェクトの先行きに不安を憶えたのかもしれない。ただ、やってみなはれという感じだったのかもしれない。そこで、我々に手を差し伸べられたものだと考える。

最終的に活動を休止するという判断と、休止の手続きを進めるというのは、あまり明るい話ではない。「さとあい」プロジェクトの終盤において、墨岡先

生に淡々と対応してもらったことは助かった。今のところ「さとあい」が終わったとは、正式には表明していない。あくまでも、一時休止である。ひとまずここで、墨岡先生の「さとあい」に対するこれまでの貢献に大いに感謝を表したい、ありがとうございますと。また、このように、これまでの活動をまとめる機会を与えて頂いたことにも感謝する。

最後の最後に、墨岡先生のこれからの活躍に期待をしたい。まずは、第二幕の幕が上がったところなのだろうと考える。なので、これからも墨岡先生のますますの活躍を目にすることが出来るものと確信している。もちろん、先生のご健康も大いに祈念申し上げます。少しだけ、まだ終わらない「さとあい」の夢も見てもらえるとうれしい。